

■今月の特選句

2022年10月



個人的にはよく分からない鮎の味

山本 賜

「それを言っちゃあおしまいよ」と言いたいところだが正直が心地いい。みんな通ぶって褒めているが本当に分かっているのだろうかという疑問もある。



おひさまの角取れている今朝の秋

山下正純

真夏の陽射しは暑いというより痛い。それが暦の上とはいえ秋になった途端にやわらいだように感じた。尖っていた太陽の角が取れたという詩心。



鈴虫の籠を振るなと言うたのに

八塚一青

鈴虫の都合も考えず、子どもは籠を振って刺激を与えて鳴かせようとする。金魚鉢もしかりで、反応を見たいものなのである。人間もまた同じ。

■今月の特選句

2022年10月



秋の風ひとさし指でなめてみる

吉川正紀子

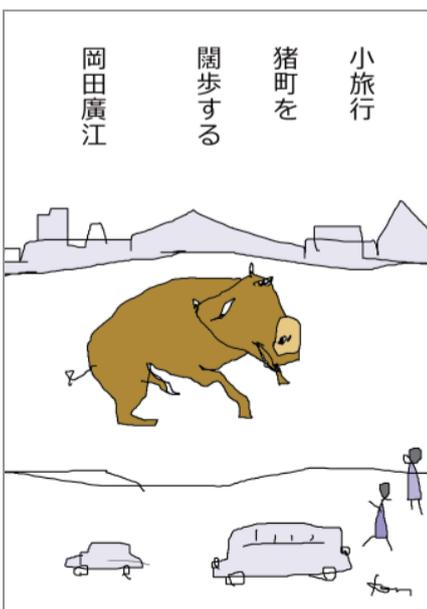
花の時期の風は甘く柔らか。夏の風は湿って潮味。秋の風はと指に吹かせて舐めてみたのだ。何事も体感して確認するのが詩人なのである。秋の風ひとさし指でなめてみる。



嫁と夫半分ずつの缶ビール

田中早苗

嫁も夫も元は他人だが、今はもうすっかり家族である。生活の中での苦楽が缶ビールに象徴されている。ほっと穏やかな時間が流れる夏の夕べよ。



小旅行猪町を闊歩する

岡田廣江

昨今、人と猪の関係は農作物への獣害で悪化の一方だが猪にしてみれば悪意はない。街中へ迷い出ているのも興味津々ちょっとした旅行気分なのだ。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

盗人萩夫を盗んでくれないか ・・・夫が好きな萩に頼むか	南とんぼ
秋空に飛行機雲の爪痕が ・・・明日も晴れて蚯蚓腫れかも	桑田愛子
わが口はブラックホール黒葡萄 ・・・いくら食べても限界のなく	渡部美香
墓越しに齢訊き合ふ秋彼岸 ・・・一年ぶりの齢の挨拶	峰崎成規
照れる程人に好かれる西瓜かな ・・・食べられたあと種を吹かれて	竹下和宏
赤ちやんのあんよが躍る夏座敷 ・・・ひと足ごとに拍手喝采	工藤泰子
住職をしておりまする鉦叩 ・・・虫の読経はエンドレスなり	土屋泰山
行く先は告げず明かさず銀やんま ・・・一瞥くれて立ち去る無言	西野周次
窓下のすいっちょ名句作れよと ・・・名句をつくるスイッチ入れる	久松久子
鬼やんまテリトリー守らんとして威嚇 ・・・こちらは虫の領土問題	井口夏子
交差点自由自在に赤とんぼ ・・・スクランブルもお手のもの	高田敏男
ドライブの右腕だけを日焼させ ・・・帰りは助手席左腕焼く	高須賀溪山
予定表すつからかんや昼寝人 ・・・寝過ぎたゆえのキャンセルもまま	白井道義

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

腹這いの早の犬に零し水	相原共良
たたくにたたけぬ魯山人の皿の蠅	相原共良
秋簾越しに美し鳥の形	相原共良
毎日が加齢とバトル日日花	青木輝子
殿様が予は満足という秋刀魚	青木輝子
コロナ禍の先の見えない穴惑い	青木輝子
カツ丼を食べたし八月十五日	赤瀬川至安
鶏肉はやつぱり嫌ひ終戦日	赤瀬川至安
奥方を「おい」と呼びたし後の月	赤瀬川至安
「パンツですか」「いやズボンです、秋物の」	荒井 類
文鮮明と安倍晋三の精霊(しゃうろ)路(みち)	荒井 類
秋の鷹ほめて育ててくださいな	荒井 類
秋めくや朝一番の風抱けば	井口夏子
秋遍路杖と同行二人かな	井口夏子
夏盛り昼寝模様の座禅哉	池田亮二
踊る噴水にわか天使のヌードショー	池田亮二
悠長や尾瀬の蜻蛉の羽ばたきは	石塚柚彩
欄干の鳥は逃げず青芒	石塚柚彩
缶ビール手に認知症の本を読む	石塚柚彩
なにもかもあれで済ませる生身魂	伊藤浩睦
冷めてからゆっくり食べるかき氷	伊藤浩睦
送り火や因果応報あるを知る	伊藤浩睦
法師蟬一節鳴いて押し黙る	稲沢進一
ロマンスは遠き昔や真葛原	稲沢進一
白色のりりしき一輪曼珠沙華	稲沢進一
秋虫に釣られてみるや腹の虫	稲葉純子
音立てて路上を走る秋出水	稲葉純子
俳句と短歌のマンネリ防止秋灯下	稲葉純子
夕立の大粒の雨宅急便	井野ひろみ
医者からの禁酒通告雲の峰	井野ひろみ
役場にてクレーム言へば秋暑し	井野ひろみ
胸に抱く夏の陽の香の洗濯物	上山美穂
自転車をこげばますます熱帯夜	上山美穂
よけるのが結構苦手黄金虫	上山美穂
蝉から虫へコーラスバトンタッチして	梅野光子
空港のロビーに迷子の蟋蟀ぴよん	梅野光子
真夏日の山すそ出番待ついわし雲	梅野光子

なで肩の喪服の列や秋寂びぬ
 美術展ガム噛む音を憎みけり
 香典はドルで貰ふや秋扇
 列できる年金の日よ八月十五日
 台風は居場所さがしにやつてくる
 よさこいよさこい踊り子をどりたる
 物価高財布があきれる秋の月
 さらさらと秋の気配を雲流れ
 泣くも笑うも熱闘の甲子園
 仏事をさぼる言ひ訳秋彼岸
 下敷もお洒落に華色休暇明
 何食わぬ顔して蜂の子食べている
 いわし雲見てより気付き買い忘れ
 アク抜けばちよい悪きゆうりとなるゴーヤ
 金魚釣子らは水面に鼻を浸け
 満月や兎頭を打(ぶ)つけさう
 芋殻焚くひよつとこばかり火の周り
 芋殻焚きまず気にするは火の用心
 闘牛のふぐりゆらゆら宇和島の
 球児らの戦い済んで秋の空
 気まぐれに山谷で買った夏帽子
 山小屋の帽子掛けに干す下着かな
 秋風や帽子の下にある秘密
 消灯の首を傾げるやもりかな
 生きてゐるアリバイ探し轡虫
 字余りのやうに弾んで百日紅
 眼鏡の蔓艶やかに伸び今朝の秋
 エリザベス女王秋の虹となられしか
 さつま芋掘ればつくつく法師鳴く
 敬老日今年はギフトカードにて
 秋暑し百日紅は咲き続け
 扇風機狸寝入りの子に回し
 羽化すれば婚活忙し蟬時雨
 水みづと叫ぶ朝顔昼下り
 それとなく嘘も方便水中花
 香水やぼつりと本音口走る

遠藤真太郎
 遠藤真太郎
 遠藤真太郎
 大林和代
 大林和代
 大林和代
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 岡田廣江
 岡田廣江
 加藤潤子
 加藤潤子
 加藤潤子
 北熊紀生
 北熊紀生
 木村 浩
 木村 浩
 金城正則
 金城正則
 金城正則
 久我正明
 久我正明
 久我正明
 工藤泰子
 工藤泰子
 桑田愛子
 桑田愛子
 佐野萬里子
 佐野萬里子
 佐野萬里子
 壽命秀次
 壽命秀次
 壽命秀次
 白井道義
 白井道義

秋茄子や大姑と小姑と

皇室に繋がる系図秋彼岸

太陽の疲れ溜まりし石榴の実

時々訛るから話が膨らむ

握り拳開いてみればちっちゃなこと

喉ならして飲む百病に効く水

炎昼のガードウーマンの付け睫毛

城の井戸釣瓶落としの秋の日の

風見鶏どちら向うと良夜かな

月上り一番鶏は眠りけり

生御霊おはせば喜寿の若女将

渋谷てふ迷宮におり日短

敬老の日古希を過ぎても祝ふ側

秋鯖を嫁が買ひくる共稼

コロナ禍もバツバツとせぬ蟻蛭(ばった)

朝顔や挨拶に元気を貰ふ

立秋の老人達の川掃除

吾が胸の星輝かす星月夜

一丁前に鎌振り上げて子蠅螂

全身にまとわりつくや汗の衣

坊ちゃんは大膽不敵南瓜割る

冷やかや女の園の車両乗る

そろばんの無くて指折る翳雲

ぼんぼんと夏雲の中潜りたき

筑波山カーブの献花彼岸花

初嵐メリーポピンズ連れて来る

雨の日は買物デーの草取女

生ビール一気飲みして生き返る

入道雲驚破(すは)原爆と錯覚す

冷房の風の届かぬバーゲン会場

今日はまたとんぼ返りの捕虫網

ボーリング鳴神続くストライク

カナカナの声なかなかの林かな

生姜焼き待ち遠しくてしょうがない

くるぶしや秋の気配をとらえたる

犬いっぴき秋の気配をかけてゆく

野球拳踊り疲れて夏祭

鈴鹿洋子

鈴鹿洋子

鈴鹿洋子

鈴木和枝

鈴木和枝

鈴木和枝

高須賀溪山

高須賀溪山

高田敏男

高田敏男

高橋きのこ

高橋きのこ

高橋きのこ

竹下和宏

竹下和宏

田中 勇

田中 勇

田中 勇

田中早苗

田中早苗

田中やすあき

田中やすあき

田中やすあき

谷本 宴

谷本 宴

谷本 宴

田村米生

田村米生

田村米生

月城花風

月城花風

月城花風

土屋泰山

土屋泰山

坪田節子

坪田節子

坪田節子

コスモスの揺れれば思い出甦る
 爺になったよとうきびの髭を付け
 重信の水澄む瀬なりコサギ群れ
 秋澄むや嘆きの如き櫓の軋み
 祭莫迦(ばか)揃ひ揃ふて浮かれちよる
 お尻とは一つか二つか桃を食む
 影もあり秘密もありて後の月
 秋ビール缶に魅せられ箱で買う
 ピンハネは五輪にもあり秋の風
 値上げ値上げ更に危険な暑さとは
 いま感染しないさせない帰省せず
 独身の息子に守宮の親子連れ
 ハンガーに二重掛けして熱帯夜
 スキヤットはルの音ばかり草雲雀
 休暇明アイロンききしシャツを着る
 あの世のみなさまお迎えせねば盆仕度
 蠅集う宗教絡み金絡み
 蛆むしの正体見たり小悪党
 蚊に好かれ分けて与えし血を少し
 天の川移住するのは死んでから
 夏の顎吊りあげてゐる白マスク
 風要らぬ世捨て人なる秋風鈴
 真実かフェイクニュースか蜻蛉の眼
 満面でにつとす孫唐辛子
 炎天や右回転のドアごとん
 溺るほど墓碑に水掛く溽暑かな
 盆踊知らない女(ひと)と目の合ひて
 はんぎきの哲人ぶるや幾世紀
 九条のいつまで持つか終戦忌
 その話のつたのつたのつた虫時雨
 鉄腕アトム満月にあこがれる
 プrintの前に正座の夏休み
 このゆびにとまる安心赤蜻蛉
 願ひごとの早口とちり流れ星
 秋めくと感じるものに七分袖
 末っ子のお古を着せた案山子かな
 開かれたままの扇を閉じて置く

長井知則
 長井知則
 長井知則
 西野周次
 西野周次
 花岡直樹
 花岡直樹
 花岡直樹
 浜田イツミ
 浜田イツミ
 浜田イツミ
 久松久子
 久松久子
 日根野聖子
 日根野聖子
 日根野聖子
 細川岩男
 細川岩男
 細川岩男
 南とんぼ
 南とんぼ
 峰崎成規
 峰崎成規
 椋本望生
 椋本望生
 椋本望生
 村松道夫
 村松道夫
 村松道夫
 森岡香代子
 森岡香代子
 森岡香代子
 八木 健
 八木 健
 八木 健
 八塚一青
 八塚一青

コンニャクの触感冷やか怪奇めく	柳 紅生
大の字の昼寝や親の夢は消え	柳 紅生
浮いて来い浮いた心でおもてなし	柳 紅生
スキーリフトのやうな稲掛天日干し	柳村光寛
初生りの梨の食べ頃知る鳥	柳村光寛
小さき音の日に夜を継ぐやちちろ虫	柳村光寛
目薬の人肌になる残暑かな	山内 更
平土機と調子合わせる法師蟬	山内 更
秋茄子に映る自分とにらめっこ	山内 更
万華鏡秋の宇宙をかき回し	山岡純子
カラカラのセミ転がってやまじ風	山岡純子
芋煮には松山あげと伊予美人	山岡純子
鈴虫の呼び鈴鳴るや今朝の秋	山下正純
秋風に波立つ草の深さかな	山下正純
お隣の庭に聴く朝の虫時雨	山田真佐子
みんな友達ひと房の葡萄つぶ	山田真佐子
古希過ぎてまだ受け入れず敬老日	山田真佐子
居酒屋の跡地に立つは女郎花	山本 賜
ゆきのした昼なお暗き庭の隅	山本 賜
休み明け咲きし真白なさるすべり	横山洋子
何となく素直になれし風の盆	横山洋子
猛暑なりメンバー代えての暑気払い	横山洋子
風の盆胡弓は一夜すすり泣き	吉川正紀子
太陽に疲れ果てたる夏帽子	吉川正紀子
水落し農翁莞爾(かんじ)と腕を組む	吉原瑞雲
七五三孫なき身にはちと羨まし	吉原瑞雲
猫舌の師に取り分くるおでん種	吉原瑞雲
藍の花希望と文字を白く抜き	渡部美香
ずり這ひのお尻ころりんラフランス	渡部美香
旧友の疎開は土蔵敗戦忌	和田のり子
ちひろ母子戦火を睨む朱夏の展	和田のり子
素っ裸秩父音頭の兜太父子	和田のり子